様式　1

論文審査の結果の要旨および担当者		
学位申請者	松原　孝明	
論文担当者	主査	北岡 克保 ㊞
	副査	吉田 澄一 ㊞
	副査	金澤 伸雄 ㊞
学位論文名	Current clinical practice for familial adenomatous polyposis in Japan: A nationwide multicenter study（日本における家族性腺腫症の手術症例、非手術症例の長期経過:後方視的多施設共同二次研究）	

論文審査の結果の要旨

家族性大腸腺腫症(FAP)において日本のガイドラインでは20代での大腸全摘術を推奨しているが、大腸全摘術後はQOLの低下がみられることがある。近年、非密生型FAPやattenuated FAPでは、頻繁な内視鏡でのフォローアップを行うことにより、大腸全摘術を回避、または遅らせるといった試みがなされている。本研究は、大腸癌研究会遺伝性大腸癌委員会の『FAPに関する後方視的多施設共同二次研究』からFAP患者の手術施行例、非施行例の長期経過を明らかにすることを目的とした。このデータはFAPを専門とする施設より後方視的に収集された。大腸癌のない非密生型またはattenuated typeのFAP患者250人を対象に分析した。その中で大腸切除術を受けた患者(n=142)(グループA)と大腸切除術を受けていない患者(n=108)(グループB)の間で比較した。非密生型FAP患者の3分の1以上が30歳以上で大腸切除術を受けていなかった。患者背景について、性別、FAP診断時の年齢、最終フォローアップ年数について有意差はみられなかったが、ロストフォローについてはグループAで有意に多かった。最終フォローアップ年齢に基づく大腸切除率は年齢を問わず大きな違いはなかった。大腸癌の発症率に違いはみられなかったが、Tis段階での診断はグループBで有意に多かった。デスモイド腫瘍の発生はグループAで有意に多かった。グループBでは全ての患者が最終追跡年まで生存していた一方で、グループAではデスモイド腫瘍と大腸癌を含む6人の患者が死亡した。

本研究は後方視的研究で追跡期間は13年であり、より長期の追跡調査の結果が待たれるものの、徹底的な内視鏡フォローを行えば、非密生型やattenuated FAP患者において非手術もひとつの選択肢になる可能性を提唱することから、学位授与に値すると判断した。